

李セボン『まんが日本昔ばなし』をめぐる考察

近年、日本の文化を代表するようになったアニメは、世界的に多くのファンを確保するようになり、留学生の中にはアニメを通じて日本を知り、より知りたいと思うと語る人が相当数存在する。また、自らをいわゆる「オタク」として分類する外国人に出会うことも、しばしばある。しかし、多くの日本アニメのファンのうちに、これから私が賞賛しようとする「まんが日本昔ばなし」について語る人はほとんどいないように思われる。元来、海外在住の日本人向けに制作され、その後も国内用の番組として放映されるに留まり、明らかに外国人視聴者を視野に入れていない作品であるからかも知れない。そこで、この場を借りて、日本の文化的な底力を示す作品として「まんが日本昔ばなし」のことを論じ、そして賞賛したい。

Wikipediaによれば、「まんが日本昔ばなし」は、1975年から1994年まで、最初はNET系、後には毎週土曜日の夕方にTBS系列で放映された（その後、2000年代まで再放送）。一つの物語に当てられた時間は約10分40秒、合計1470の物語が作られた。私と同世代（30代）の日本の知人たちの証言によれば、子供の頃、土曜日の夕方に誰もが一度はこの番組を見たことがあり、大概の場合、オープニングのテーマ曲を口ずさむことができるほどである。再放送された期間も含めれば、戦後生まれの日本在住者の多くは、「まんが日本昔ばなし」の記憶を共有していることになる。

それぞれの物語は、各地方に伝来された昔話から創作童話の類まで様々である。たった二人の声優（常田富士男・市原悦子）がすべての登場人物を演じるという独特の形式を維持しているが、とても二人だけとは思えない、豊かな演技である。アニメの原画も、多数のイラストレーターによって作られたがゆえに、見ていて飽きない。何よりも、物語としての豊富さ、奥深さが、すごい！おそらくそれは、子供向けの物語だからといって、ただ単に美しい世界を見せねばならないというような強迫観念が無いからであろう。例えば、死に対する過剰に遠慮がましい姿勢がここには無い。自然と調和をなして生きた「昔」の人々の、そのありのままの姿を描くがゆえに、病気や死といった、現代ではやや否定的に観念される（特に子供向けの物語では）事柄をもごく普通に扱っている。あるいは、ハッピーエンドに拘らないという点も特徴的である。勿論、善人が報われるといったお馴染みの話は多いわけだが、報われない場合も多い。呆気ない終わり方もそう珍しくない。ともかく、常に終わりを予測できない。狸や狐、天狗のような想像上のキャラクターが多く登場するとはいえ、全ての話は、人間に関する真摯な考察に基づいている。

それは、例えば、ディズニーアニメに代表されるような固定された世界観や、近年の多くの日本のベストセラー漫画・アニメが描くような、人間性を離れた作為性の世界とは、

根本的に異なる。「日本」の「昔ばなし」が語られていると同時に、人間とは何か、という普遍的な問いが根底に流れている。それゆえに、外国人である私が過去の日本にあったであろう美德にこれほど純粋に惹かれるのであろう。

ある国の昔話を知ることによって、学問的な知識だけでは得られないような見地を得ることもある。私自身も実際、日本の近世史についていくら専門書をもって勉強しても、日本で生まれ育った人々が抱いているような過去のイメージを持つことは難しかった（無論、これは日本だけに限られた話ではない）。例えば、平田篤胤（ひらたあつたね。国学者。1776～1843）の『仙境異聞』（天狗さらいにされた少年からの話を聞いて書かれた本）を読むだけでは、天狗のイメージおよびそれが語られてきた文脈を掴み難い。同様のことは、狸についても、地蔵様についても言える。活字だけを通しては掴められなかった、日本の「昔」の人々が営為していた日々の暮らし、その中での常識といったものが、鮮やかに現れてくるのである。そのような感覚を覚えることは、自然と歴史と文化への理解を深めることに繋がる。そこで、思いは次のようなところに至るのである。現在ほど、日本人自身にとっても、外国人にとっても、そうした感覚を切実に必要とする時代はない、と。そして、間近の歴史ばかりでなく、より長いスパンでの歴史的な想像力を養うための大事な手掛かりがここにあるのではないかと！

ただし、そのような効用の側面を考えなくても、物語として、「まんが日本昔ばなし」には一見する価値が十分（過ぎるほど）あるように思われる。ぜひご覧いただければと思う次第である。